

なぜ自分は、自分の外見にこだわるのか
被服や化粧によって飾られた自分を探る

学籍番号 12022029 粕尚美

担当教授 立木茂雄

目次

はじめに

1 問題提起

1.1 なぜ自分は、化粧、髪型、被服によって自分の外見を飾るのか

1.2 仮説と研究の方法

2 先行研究より

2.1 小学校6年生のころの自分

2.2 共同体のなかで存在する自己

2.3 外に見せる自分とその内面

2.4 化粧、髪型、被服などの外見を飾ることによる自己の呈示

3 小学校6年生から現在までの自分

3.1 写真から自分の記憶をたどる

3.2 自己の人間関係をつくる上での優先順位

4 結果

4.1 小学校6年生のころ

4.2 中学校時代

4.3 高校時代

4.4 浪人時代

4.5 大学時代

5 これからの自分

おわりに

参考文献リスト

はじめに

なぜ私は、化粧をしたり、髪をセットしたり、服にこだわったり、外見を飾るのであるうか。小さいころは、自分の外見など気にしていなかったのに、なぜ気にするようになったのであろうか。この理由を探ることによって、自分を明らかにしていきたいという思いから、このテーマを卒業論文として書くことになった。私の外見を飾る行為というのは、過去のどのような出来事や体験によるものなのか。小学校6年生のころから現在までの自分の写真集め、過去それぞれにおいて、私は、どのような共同体のなかで、どのような他者と、どのような人間関係をつくり、自分がその共同体のなかで、どのように感じていたかという記憶をたどった。

その記憶のなかで、私は、さまざまな共同体のなかで、さまざまな他者から影響を受け、そのときそのときの自分が形成され、いまの自分が形成された。

そして、自分を見つめなおし、これから、自分はどのような人間になっていきたいかということを時間をかけて考えていきたい。

1 問題提起

1.1 なぜ、自分は自分の外見を飾るのか

人は、それぞれ、自分の収入にたいする使い道が個人個人によって違う。たとえば、お酒が好きな人であれば、自分の収入の大部分を、お酒を買ったり外に飲みに行くことにつかうであろう。また、音楽が好きな人であれば、楽器を買ったり CD を買うことにつかうであろう。現在 23 歳、大学 4 回生の私は、アルバイトによる収入の大部分を、服や化粧品、靴など、自分の外見を飾るためのものを買うためにつかっている。私は、毎日、メイクをして学校に行き、雑誌などによって、流行の服や靴、髪型をチェックしては購入している。学校に行く時だけではなく、アルバイトに行く時や、友達と遊びに行く時、家族と出かける時にも、メイクをし、服を選び、それに合う靴を選び、髪型をセットして外出している。なぜ、私は、他者に会うとき、ありのままの自分ではなく、メイクや被服によって自分を飾るのであろうか。わたしは、人間関係において、第一印象というものが非常に重要なものであるという意識が存在する。誰かが私にたいして私の第一印象を決定する際、最も大きな決定因となるのが、外見的魅力のように思う。つまり、外見的魅力というものは、人間関係において、強力な力となるという確信が自分のなかで存在している。では、私がこのように思う自分になったのは、過去のどのような出来事や他者からの影響があったことによるものなのであろうか。

私にとって、この疑問を追求するということは、自分自身を明らかにすることになる。私の大学生生活の 4 年間というものは、毎日アルバイトや友達との予定で非常に忙しいものであったが、大学生生活の最後に、少し時間を取り、化粧や被服によって飾られた外見をはがし、自分がどのような人間なのかということのを改めて考え、明らかにしていきたいと思う。

1.2 仮説と研究の方法

私が自分の外見を気にするようになったのは、小学校 6 年生のころからである。なぜ、外見を気にするようになったのか。仲間集団への帰属意識、異性への関心、身体的魅力が人気を得るための強力な武器となることを意識した結果の行動である、という仮説がたてられる。

この仮説を検証していくためには、過去それぞれにおいて、私は、どのような共同体の

なかで、どのような他者と、どのような人間関係をつくり、自分がその共同体のなかで、どのように感じていたかということが、重要になる。そこで、小学校6年生のころから現在までの写真を集め、それによって引き起こされる記憶をデータとして用いた。

2 先行研究より

2.1 小学校6年生のころの自分

E.H.Erikson (1950)によれば、自己の発達には、次の8つの段階が存在するという。それは、乳児期(誕生~2歳)、歩行期(2~4歳)、学童前期(5~7歳)、学童中期(8~12歳)、青年期(13~22歳)、成人前期(23~30歳)、成人中期(31~50歳)、成人後期(51歳~)という段階に分かれる。それぞれの段階において、自己の発達に大きな影響を及ぼす変化が見られるという。ここでは、学童中期と、青年期に注目したいと思う。

学童中期の子どもは、同じ年頃の仲間との日常的なかかわりから、次のことを学んでいくという。仲間集団のなかで示されるいろいろな見方や考え方、仲間集団の社会的規範や圧力に敏感になること、同性の仲間との親密な経験を通して学ぶことである。仲間集団というのは、受容・拒否の規範をつくりあげる。この時期の子どもは、仲間集団のなかでの、こうした社会的規範に気づくようになると、準拠性への圧力を経験することになる。承認や受容の対象として、それまで主に教師にたよっていたのが、学童中期の子どもは、仲間集団が重要な役割を演じるようになる。仲間の受容を得たいという欲求は、準拠性にたいする強い力となる。周囲の仲間を受け入れられるかっこうをし、しゃべり方をし、冗談を言う。そして、他者から下された自己の評価というのが、仲間集団が受容や拒否を生み出すものとして機能するために、他者が自分にたいして持つ期待や、他者が自分にたいして下す評価に敏感になっていく。この仲間集団というのは、家庭内での集団から、より大きな社会集団に子どもを組み入れる、過渡的な機能を果たすものである。

そして、青年期における大きな変化というのは、思春期的変化と呼ばれる身体的成熟によって、男性と女性とで、異なった問題を提起させる。この身体的変化が、自己の発達に大きな影響をおよぼす。男性も女性も、身体的な変化に適応していかなければならないが、男女が経験する諸変化にたいして、文化によって違った価値づけやタブーを課しているのである。

青年女子の場合、思春期のはじまりは、11歳頃に生じる。身体的変化についての青年女

子の最大の関心事は、ふとることである。身体の成長が急激に進行しはじめると、多くの青年女子は、自分の身体が丸みを帯びてくることに気がつく。こうした体型の変化が、第二性徴にともなう必然的な変化であると考えないで、ふとる前兆としてとらえ、ふとることを防ごうとして、時に厳しく食事制限をはじめめる。

さらに、第二性徴のなかで、とくに体毛の発達は、男子の場合よりも女子の場合にやっかいな問題となる。体毛のない肌の女性が好まれるといった文化的嗜好によって腋の下や足の体毛を剃ることが要求される。青年女子は、女らしさについての文化的基準に合致するように、自分の身体的外見を変えなければならないことを知る。さらに、より女らしい理想に近づこうとして、化粧をはじめめるようになるのである。こうして、青年女子は、化粧をとおして、ナルシスティックな欲求を満たそうとするのである。

青年期になると、仲間集団は以前にもましてより構造化され、組織化されたものとなる。したがって、個人と仲間集団との関係は、以前よりもより明確に位置づけられるようになる。この時期における人気や仲間集団への受容は、身体的容貌、運動能力、社会的階級、勉強の成績、将来の目標、宗教や人種、特定の才能という特徴のうち、1つあるいはそれ以上の特徴に基づいている。成員性の基準は公には表現されないとしても、集団は一貫した基準に基づいて成員を選別している。このなかでも、身体的魅力というものが、人気を得る際の強力な力として機能し、魅力的であるか、まったく魅力に欠けるかによって、集団からの受容や拒否の主要な決定因になる。そして、ある仲間集団と友好的関係を確立するようになると、その集団の内的構造や規範に気づくようになる。その集団の構造や規範のなかで、どのようなことをしたらよいのか、他者から何を期待されているのかを学ぶようになる。

そして、青年期では、同性との仲間関係にくわえて、異性との関係も重要性を帯びてくる。身体的変化は、異性関係についての関心を引き起こす。青年がデートをはじめたり、異性と仲良くしたり、異性にやさしさを示すといったことが、文化的に期待されるようになる。青年女子は、多くの男性と出会って、それらの者から愛情や承認を得る過程をとおして、自分自身を女性として評価し、性的な経験に楽しみを見いだすことを学んでいくのである。

2.2 共同体のなかで形成される自己

K.J.Gergen (1999 = 2004) によれば、自己というものは、関係のなかの存在として捉

えることができるという。人の知識は、人々の関係のなかで育まれるものであり、個人の心のなかではなく、共同的な伝統のなかに埋めこまれている。

Gergen (1999 = 2004) は、心理的な言説は、パフォーマティブな機能を持つという。つまり、「何かを言う」ということによって、人は、特定の関係のなかで特定のパフォーマンスを行なっている。大切なのは、発話の内容ではなく、その発話がさまざまな関係のなかで、どのように機能するかということである。たとえば、消え入りそうな声で、目線を床に落とし、微笑みながら「私は怒っている」と言っても、人は、発話者が何を伝えたいのか理解できない。自分たちの文化において、適切に「怒り」を演出するには、声の激しさや大きさ、顔をしかめたり、前身をこわばらせたりすることが必要である。

さらに、Gergen (1999 = 2004) は、パフォーマンスは関係性のなかに埋めこまれているという。人が心理的状态について話す時、その発話は、ある関係のなかで、特定の誰かにたいして向けられたものである。パフォーマンスが誰かに向けられたものであるということは、それが受け手に応じて形作られているということになる。たとえば、ある人の怒りの表現は、それが自分の子どもに向けられる場合と、同僚や両親に向けられる場合とでは、決して同じではない。ある表現のなかには、他者が、その形成のプロセスにおいて入りこんでくるのである。したがって、ある人のパフォーマンスは、必ずある関係の構成要素であるということになる。それは、これまでの関係の歴史や、それが向けられていく関係をも含んでいる。心理的な言説をパフォーマティブなものとして扱い、パフォーマンスを関係のなかに埋めこむことによって、心に関するすべての語彙は、関係によって、関係のなかで構築されたものであると考えることができる。

また、Gergen (1999 = 2004) は、記憶というものは、共同体のなかに配分された、集合的な行為であるといっている。たとえば、家族が再会した時にする昔話というものは、彼らの心のなかにある像ではなく、長い家族の歴史のなかで温められ、その家族に配分された、会話の形なのである。

さらに、Gergen (1999 = 2004) は、感情の表現を、「シナリオ」という概念を用いて、関係のなかのパフォーマンスとして理解している。シナリオに書かれている1つ1つの行為は、次に続く行為の舞台を用意すると同時に、先立つ行為は後の行為によって理解可能なものとなっている。それぞれの役者のパフォーマンスは、劇に筋の通った統一性を与えるために不可欠であり、それぞれのパフォーマンスが理解可能なものになるかどうかは、それ以外のパフォーマンスによって決まる。この考えによると、感情的なパフォーマンス

は、文化に特有のシナリオを構成するもの、すなわち、他者を含んだ劇の一部であるとみなすことができる。「怒りの叫び」も、関係におけるシナリオのなかに位置づけられなければ、意味をなさない。つまり、そうした表現はいつでもどこでも起こるわけではなく、文化的にみて適切な、ある文脈のなかでしか生じえない。たとえば、家族で静かに食事をしている最中に、突然、地団太を踏んで「頭にきた」と叫びだすことはめったにない。しかし、誰かに自分のプライバシーが侵害された場合には、同じ表現が適切なものになる。つまり、ある感情のパフォーマンスをするには、それに適した時と場合が存在する。さらに、ある感情のパフォーマンスがなされると、感情のシナリオによって、後に続く行為が決定される。たとえば、友人の1人が自分に、「実は、自分は不治の病にかかっているんじゃないかと思う」と打ち明けた時、文化的なシナリオによって、自分の反応のうち、同情やいたわりの表現は適切とされ、くだらない冗談を言うことは禁止される。この考え方から、感情とは、個人の心の所有物ではなく、関係の持つ特性である。

Gergen (1999 = 2004) は、このような考え方から、自己を関係性のなかの存在として捉えている。人は、常に他者とともにあり、お互いによって作り上げられているという。

2.3 外に見せる自分とその内面

G.H.Mead (1934 = 1973) によれば、個人の自己というのは、それ単体では成立せず、その形成には他者、社会とのかかわりが必要であるという。人は、異なった人びととの異なった関係において、自分自身を、あらゆる種類の異なった自己に分割する。つまり、人は、あらゆる種類の異なった社会状況に対応する、あらゆる種類の自己が存在するのである。そして、自己というのは、社会過程の反映であるという。

さらに、Mead (1934 = 1973) は、自己は、I と me の2つに区別できる局面とともに進行する社会過程であるという。me とは、人が自ら想定する他者の態度の組織化された組み合わせであり、対他的な自分、外に見せる自分である。I とは、他者の態度にたいする反応で、主体として存在する自己、対自的な自分であり、自分では見ることができない。自己というのは、状況において想定される他者の態度が要求する反応として me が生じ、次に、人は、その me にたいして I として反作用する。

たとえば、自分がある他者に、ボールを投げられるのも、チームの他の人たちから自分に、そうしろという要求がなされているからである。これが、自分の意識のなかで、自分にとって直接に存在している自己なのである。自分は他者たちの態度をもち、彼らが何を

望んでいるか、自分の行動の結果がどのようなものであるかを知っている。これらの態度の組織化された組み合わせが、me を構成する。しかし、それがどのようなものになるかについては、自分は知らないし、他の誰も知らない。自分はすばらしいプレーをするかもしれないし、エラーをするかもしれない。自分の経験のなかに現われた状況への反応は不確定であり、それが I を構成する。I は、自らの行為の内部の社会状況に対抗する自分の行動であり、それは自分が行動を遂行した後に、自分は I を自覚する。

そして、me と I の相対的価値は、状況に大きく依存しているという。me は、現存している共同体への適応であり、me であるということは、人に共同体の成員であるという尊厳を与える。I は、人が自分を表現する方法であり、その共同体を変革させる個人の反応である。

また、Mead (1934 = 1973) によれば、新しい衣服の流行にたいして、はじめは反対という態度であった人も、しばらくたつと、その衣服に注目し、それを着ている自分を見ることが、変化した流行のなかにいる自分自身について考えるようになる。自分は気づかないが、自分のなかで変化が起きたのである。したがって、他者と相互行為する人間が、無意識的に、同じことをする他者と似るようになるという。

2.4 化粧、髪型、被服などの外見を飾ることによる自己の呈示

E. Goffman (1959 = 1974) は、人がおくる日常生活において、ある人が、自分自身と他者にたいして、自己をどのように呈示するか、他人が自己について抱く印象をどのように統制するか、ということ、劇場的パフォーマンスという視角で論じている。人は常に他者にたいして、パフォーマンスを提供し、ショーを演じている。その劇場に必要な舞台装置として、家具や装備品を用いているのである。そして、服装や体の大きさ、容姿、言葉づかい、身振りなどを個人的外面としてとらえ、人が、パフォーマンスにおいて、意識的、あるいは無意識的に用いる表出装備となる。

さらに、Goffman (1959 = 1974) は、日常生活における呈示行為には、2つの極限の場合が存在するという。1つは、自分自身の行為に「欺かれる場合」である。つまり、行為者は、真面目に、自分が舞台にのせた呈示行為を現実そのものだと信じこんでいる場合である。もう1つは、自分自身の行為に「醒めている場合」である。つまり、自分の呈示行為に全然欺かれず、他者にたいして自分のパフォーマンスを提供する場合である。それぞれの場合、独自の安全策と防衛手段を個人にあたえるという。したがって、これらの極

の1つの近くまで行ってしまっている人びとは、その行程を終わりまでいってみようとする傾向を持つ。つまり、自分自身の行為に「欺かれる場合」の人びとは、舞台上の自分、演技している自分が本当の自分だと信じ込み、そのまま信じつづける。そして、自分自身の行為に「醒めている場合」の人びとは、他者に対する自分の呈示行為は、舞台上のパフォーマンスであると知っていながらも、演技を続けるのである。

3 小学校6年生から現在までの自分

3.1 写真から自分の記憶をたどる

私は化粧をし、服装を選び、髪型をセットするなど、なぜ外見を気にするようになったのかということを探ることを目的とし、小学校6年生のころから現在までの自分の写真を集め、私は、どのような共同体のなかで、どのような他者と、どのような人間関係をつくり、自分がその共同体のなかでどのように感じていたかという記憶を書き留めていった。

自分にとって、大きな環境の変化があった時期、小学校6年生の時、中学時代、高校時代、浪人時代、大学時代の5つに分け、それぞれにおいて、過去の自分を客観的に記述した。

3.2 自分の人間関係をつくる上での優先順位

3.1の過去の自分により得られた情報のもとで、過去それぞれの時代において、私は、他者と人間関係をつくる上で、自己の外見、自己の内面、他者の外見、他者の内面、のうち、どれをより優先していたかということ、図に表わした。それが、図1、図2、図3である。それぞれの時代において、なぜそのような優先順位になったのかということ、過去の自分の記述から、具体的な事実や出来事を根拠に記していった。

4 結果

4.1 小学校6年生のころ

小学校6年生の時、私は、35人くらいのクラスに所属していた。そのクラスは、半分くらいが男の子、半分くらいが女の子だった。そして、女の子は、仲の良い5~6人くらいの集団、グループをそれぞれ作っており、休み時間や移動教室、放課後、週末など、授

業中以外のほとんどの時間をその仲良しグループで過ごしていた（写真1）。



写真 1

その女の子のグループというのは、それぞれ特徴を持っており、明るくて積極的で、男の子ともよく話し仲が良い女の子の集まりや、比較的に大人しく、消極的で男の子とはあまり話さない女の子の集まり、また、その中間的な女の子の集まり、というように、似たもの同士が集まって、グループが形成されていたように思う。そして私は、明るくて男の子とも良く話仲良くするグループに所属していた。そのグループは、6人くらいの女の子で形成されており、リーダーシップを取るような女の子が一人、小学6年生には見えないほど、見た目が大人っぽい女の子が一人、よく話し、明るい女の子が三人、そして私が所属していた。

それまでの私は、親に選んでもらった服を着て学校に行き、髪型も親にくくってもらい、全てを親にまかせ、自分で自分の服や髪型を気にするという考えそのものがなかった。そして、自分の体型もなにも気にしていない女の子だった。

そして、小学校6年生になり、その仲良しグループに所属するようになって、そのグループの中でも、私が一番仲良かったのが、小学校6年生には見えないほど、見た目が大人っぽい女の子だった。その子は、親からお小遣いをもらい、梅田などに出て自分で服を買い、学校に着てくる服も自分で選び、髪にワックスをつけてセットし、自分の体重を気にして、「最近太ったからやせなあかん」と言い、ダイエットをするような女の子だった。その子は、当時の私から見て、外見的にとてもかわいい女の子で、男の子からも人気があるような子だった。性格も明るく、男女問わず、好かれていた。私は、その女の子に、憧れのような感情を持っていたように思う。

そしてある時、その子から、「今度の日曜日に一緒に映画を見に行こうよ」と誘われ、喜

んで「うん行く」と返事をしたが、その子から、「梅田まで行くから、中学生に見えるような格好をしてきてね」と言われ、とても困った記憶がある。それまで自分の服を自分で選んだことさえない私は、家に帰ると、母親に相談して、自分の服を全部出してきて並べ、どういう服装が大人っぽく見えるかを考え、いろいろ服を着ては鏡を見て、母親と一緒に選んだ。そして当日、苦労して選んだ服を着て、家にあったワックスを自分なりに、その子がいつもセットしているように、髪につけ、姉の靴を借りて、出かけた。そして、その子に会った時、「いつもと全然違ってかわいいやん」と言われ、その時の私の精一杯のオシャレを、その子に褒めてもらったことが、とても嬉しかった記憶がある。その日は一日中嬉しくて、とても楽しかった。

その時を境に、私は、その子のマネをするようになった気がする。学校に着ていく服を、親が用意しているにもかかわらず、「こっちがいい」と言い出し、その子が着ている服と似たようなものを着たり、髪にワックスをつけて、自分なりにセットして学校に通うようになった。そして、誰かに、「今日の服かわいいやん」などと言われるのが、嬉しく思うようになった。その子のマネをするようになったのは、私だけではなく、そのグループのほかの女の子も、それまで、気にしていなかったのに、髪をセットしてきたり、かわいい服を着てくるようになっていた。

その私が所属していたグループは、芸能人の話、流行の音楽の話、そして特に多かったのが、体重の話と、男の子の話だった。その仲が良かった女の子がよく言ったのが、「痩せなあかん。」と、よく言っていた。その子は、標準な体型に見えたが、自分の体重をとてても気にしていて、いつも痩せようとしていた。その子の影響からか、私を含め、そのグループ全員が体重を気にしていて、健康診断などで体重測定がある度に、沈んだり喜んだり、体重のことが、よく話題にも出で来た。当時の私は、今の自分から考えると、標準体型だったと思うが、体重が重いということが、異常に恥ずかしいことのように思っていた。そのため、過度のダイエットなどはしていなかったが、毎日体重計に乗り、体重が増えていたりすると、お菓子などを我慢して、減らす努力をしていた。

そして、グループ内でよく話題に出たのが、男の子の話である。それぞれみんな好きな男の子がクラス内にいて、その話題でよく盛り上がった。私も当時好きな男の子がいて、その子に少しでもかわいく見られたいと思っていた記憶がある。そのためには、仲が良かった子のマネをしたらいいと思っていたように思える。

小学6年の途中くらいから、クラスのある男子3人が、女子をいじめるようになった。

言葉の暴力や、時々には実際に手を出す暴力、無視などである。そしてその男子にいじめられた子は、女子の間でも無視をされるようになった。つまり、その男子三人に嫌われた子は、クラス中から無視されるようになった。その男子三人がよく目をつけたのは、比較的大人しく暗い子や、自分にたいして生意気な子である。そのイジメは、担任の先生に発覚するまで続いた。その時の私にとっては、クラス中から無視をされ、誰一人話さず、一人で学校生活を送るのは、考えただけでも恐ろしいことだった。そのため、まず思ったことは、自分が所属するグループの女の子に好かれることだった。その男子三人の中でも一番のリーダー格の男の子が、私が所属するグループのリーダー格の子、私が仲が良かったオシャレな子とは仲が良かったので、その二人はいじめないだろうと思った。その二人に好かれたら、イジメは回避できると思い、いじめられないためには、そのグループから、絶対にはみ出ないことだと思った。当時の私にとってはグループに所属し続けるということが、何よりも大事なことだった。そのため、憧れの感情から、オシャレな子のマネをしていたのが、さらに、グループ内の子と似たような服装、髪型、話題をしていたら、そのグループからはみ出ることはないだろうという意識からも、みんなのマネ、とくにオシャレな子のマネをするようになった。学校に着ていく服をさらに慎重に選ぶようになり、体重をさらに気にするようになった。その服装や髪型や体型にたいする気配りは、そのイジメが担任の先生に発覚し、解決してなくなってからも、続けるようになった。それは、多分、グループにこれからも所属していきたいという思いと、好きな男の子がいたからだと思う。

小学6年生の頃から、体育やプールの時間の時に、肌の露出が恥ずかしいと思うようになった。それは主に、体型がはっきり見えるのが恥ずかしいということだった。そのグループに所属してから体重を気にするようになった私は、体育やプールの時に、はっきり自分の体型を見られるのが嫌だった。常に周りの目を過剰に気にしていた。そのグループの中では、痩せている女の子がかわいい女の子で、太っている女の子は、ダサい女の子、という共通の認識があった。クラス内でも、少し太っている女の子は、他の女の子や男子から「太いねん」と、からかわれたり、「痩せた方がいいよ」とはっきり言われていた。私にとっては、からかわれたりすること自体がかっこ悪い、ダサい事のように思え、自分がそうなるのがとても嫌だった。体育やプールの時間は、隠しようがなく自分の体系が露出され、それを男女問わず、見られるのがとても嫌だった。それは、仲良しグループ内での認識が、痩せている女の子がかわいい、太っている女の子はダサいという認識があったからのように思う。

4.2 中学校時代

中学生になると、制服、白の靴下、白のスニーカーと決められていた。

中学校のクラスでも、女の子は仲好しグループを作った。そのグループもやはり、明るくて積極的な子、似たもの同士が集まり、休み時間などを一緒に過ごした。特に激しいイジメなどはなく平穩に過ごしていた。

入学した頃の私は、髪が肩につくぐらい長かったが、中学校1年生の時にぱっきり切って、ショートカットにした(写真2、3)。それは、バスケット部に入部したからである。そして中学校3年間の多くの時間をバスケットに費やした。中学校1年、2年、3年とも、もちろんクラスで仲の良いグループに所属し、同時に、バスケット部というグループにも所属した。



写真 2



写真 3

中学校の最初の頃は、女の子がある男の子と仲良くしているだけで、「あの子は くん

のことが好きらしい」とか、ある男の子と女の子が特別仲良くしただけで、「あの二人は付き合っている」という噂が流れる、というように、男子と女子の關係にたいして、みんながとても敏感だった。仲良しのグループで集まった時の話題も、大半が好きな男の子の話であった。私も当時好きな人がいたので、このころから、異性と付き合うということに、興味を持ち始めた。

この頃の自分を思い返すと、よく勉強をして、部活も一生懸命するような子だった。バスケットがとても楽しく、毎日の朝練、授業後の練習、土日も試合というように、多くの時間を費やした。

そして、中学校2年生になると、校則ではスカートの長さは膝下と決められていたが、仲よしグループの女の子たちが、膝上の短いスカートをはくようになった。その仲良しの子らは、私から見て、明るくて、男子とも仲良くし、かわいい女の子たちだった。私は、仲良しの他のみんなが短いスカートをはく中、膝下のスカートはダサいという意識が生まれた。膝下のスカートをはく子はダサくて暗い、膝上のスカートをはく子は、かわいくて明るいと思い、母に頼んで自分のスカートの丈を短くしてもらった記憶がある。それはただ単にみんながやっているから、そっちの方がかわいいと思い、マネをした。短いスカートをはいて学校に行くと、みんなと同じで、かわいい子らの中に入れたような気分になり、気持ちが良かった(写真4)。



中学校3年生になると、仲よしグループの中で、男の子と付き合う子も多く出てきて、

私もますます興味を持つようになった。校則では、靴下は白と決められていたが、ワンポイント絵が入った白の靴下をみんながはいていたので、また同じように、私もマネをしていた。短いスカートをはいて、ワンポイント入りの白の靴下をはき、髪にワックスをつけてセットし、学校に行った。

そして、小学校6年生の時と同じように、体育やプールの時に、肌の露出が恥ずかしいと思うようになった。体型を気にし、太っているということが、とてもダサく、恥ずかしいことだと思っていた。細い体型の方がかわいいと思い、なるべく細い体型になろうと、体重が増えた時には、減らす努力や、増えていない時でも、太らない努力をしていた。

小学校6年生から中学時代までの、優先順位の図が下記の図1である。

	自己	他者
外見	1	2
内面	3	4

図1 小学校6年生～中学時代

小学校6年生から中学時代の私は、仲良しグループに所属し続けたいという思いから、友達のマネをしていた。そのため、他者と新しく人間関係をつくる際、自分が所属するグループのメンバーと同じように、外見に気をつかい、外見を飾っているような子、または、一般的にみてかわいい子を選んで友達になっていた。そのため、自分が他者から選んでもらう時、同じような基準で選ぶものだという意識があったので、自分の外見が優先順位1番になっていた。

また、異性を恋愛対象としてみる時も、まず外見から気に入り、自分が気に入られるためには、自分の外見を見られるというように思っていた。

4.3 高校時代

私の通っていた高校は、私服、茶髪が許され、着装に関してはほとんど自由な高校だった。生徒は、自分の好きな服装をし、好きなカバンをもって、好きな靴をはき、好きな髪型をして学校に来ていた。そのため、自分の外見を飾ることに気を使っている女の子は、一目でわかった。高校のクラスでも、やはり女の子はグループを作っていた。そのグループの特徴は、わかりやすく、服装や髪型に気を使い、見た目が比較的派手な女の子の集まり、

あまり外見を気にしていない女の子の集まり、その中間的な女の子の集まり、というように、やはり似たもの同士が集まってグループを作っていたように思う。

小学校時代、中学校時代に続き、私は、高校時代も服装や髪型や体型を気にしていたが、高校時代はイジメも全くなかったのも、それは、自分が所属する仲良しグループに所属し続けたいという思いよりも、異性を意識して自分の外見を気にしていたように思う。毎日服を慎重に選び、髪にワックスをつけてセットし、靴とカバンも服に合わせて選び、学校に通っていた。

高校1年生の時、クラスで一番仲が良かった女の子が、服や靴や髪型をいじるのが非常に好きな子で、話が合い、とても気が合ったので、私とその子は、すぐにとっても仲良くなった。その子はすでに入学した時から、化粧をして学校に来ていた。毎日流行のかわいい服を着て、その服に合う靴やカバン、そして、欠かさず化粧をしていた。その子は化粧をするのも、とても好きだった。その子との話題の中で、一番多かったのが、服の話、そして好きな男の子の話だった。それぞれに学校内に好きな子がいて、よく二人で盛り上がった。そして私が、高校1年の2月に、当時好きだった男の子に、バレンタインのチョコを渡して告白することを決め、その子に相談すると、「じゃあ、私がメイクしてあげる。絶対に今よりずっとかわいくなるから。」と言われ、私は、それまで化粧をしたことがなかったし、でも興味はあったので、日曜にその子を家に呼んで、試しにメイクをしてもらうことになった。その子は、本当に化粧が好きで、私の顔を楽しそうに化粧をしていた。「終わるまで見たらあかん。」と言われ、なすがままに化粧をされて、「はい、できた。」と鏡を渡されて、自分の顔をみてもみると、自分が別人みたいに思えた記憶がある。その子に「ね、かわいくなったやろ」と言われ、素直に「うん。すごい変わった」と答えたことを覚えている。それから私は、その子に、自分の化粧品が欲しいと言い、その子が使っている化粧品を教えてもらい、一緒に買いに行った。そして、メイクの仕方をその子に教えてもらい、毎日化粧をして学校に行くようになった(写真5)。



写真 5

そして、高校2年生になると、クラス変えがあり、新しい仲好しグループに所属したが、そのグループ内の女の子たちも、すでにメイクをしていた。この頃から、他の女の子を見て、「あの子かわいいな」と思ったり、「あの子の服かわいいから、今度買い物行った時にあんなん見てみよ」と思ったり、他の女の子の顔や服装や髪型を観察するようになった。また、高校1年生のころからアルバイトを始めて、自分の自由に使えるお金が手元にあった。それから親にお小遣いを貰わなくなった。自分の収入のほとんどを毎月新しい服や靴や化粧品を買うことに費やしていた記憶がある。そして、この時の仲良しグループの女の子達との話題の多くも、流行の音楽や服装や髪型、恋愛の話をいつもしていた。この頃、仲の良い女の子がファッション雑誌を読んでいたので、マネをして同じ雑誌を毎月買うようになり、流行の服装や髪型、靴やカバンを雑誌でもチェックするようになった。その女の子のグループの中で、男の子と付き合ったりする子が何人も出てきて、その子らの話を聞いていると、自分も興味がわき、「私も彼氏がほしい」、「男の子と付き合ってみたいな」という気持ちが大きくなっていった。

そして、他の女の子を観察していくうちに思ったことは、自分が「あの子かわいいな」と思った子は、彼氏がいたり、彼氏がいなくても、男の子に人気がある女の子だった。自分が仲良くしている女の子のグループの中でも、一般的にそれほどかわいくなくても、彼氏がいた子は確かにいたが、外見的にかわいい子は、高い確率で、男の子に人気があった。当時私は、好きな男の子がいたので、その子と付き合うためには、「外見的にかわいくなればいいんや」という意識があったように思う。そのため、雑誌を買って、流行のかわいい服や靴をチェックし、買い物に行き、毎日髪型をセットし、欠かさず化粧をして学校に行くというのが、自分の中で当り前のことになった。眉をきれいな線にし、目は少しでも大きく見せるような化粧を雑誌や友達から習い、肌が綺麗に見えるようにファンデーションを

ぬり、雑誌にのっている流行の服や靴をはき、自分の外見を磨いた。この頃は、小学校や中学時代よりも、体重が自然と落ち、食べてもあまり太らなかったで、体重のことはあまり気にしていなかった。

私服の高校なので、毎日違う服を着て学校に行くため、雑誌をチェックし新しく買った服を着て学校に行くと、気持ちいい気分だった。そして、友達に、「今日のその服かわいいやん」とか、「今日の髪型かわいいやん」などと外見を褒められると、とても嬉しかった。

雑誌やテレビなどをみていると、「この人かわいい」と思った人は、ほとんどの確率で、髪を茶色に染めていた。そして、仲良しグループ内の女の子たちや、自分がかawaiiと思う女の子たちも、ほとんど髪を茶色に染めていたので、自分も茶色にしたほうがかわいくなるのではないかと思い、高校1年生の時に髪を茶色に染めた(写真6)。そして学校に行くと友達に「髪の毛染めたんや、かわいいやん」と褒められ、それが嬉しくて、それ以来、現在も髪を茶色に染めている。



この頃から、メイクをしていない時の自分を家族以外の誰かに見られるのが恥ずかしいと思うようになった。学校の友達や、好きな人ならなおさらメイクをしていない時の自分の顔を見られたくなく、絶対にメイクをして学校に行っていた。それは、メイクをしている時の自分と、メイクをしていない時の自分が、あまりにも違うと思ひ込み、メイクをしている時の自分の方が、メイクをしていない時の自分よりも、かわいいという確信があったからで、常にかawaii方の自分を見せたいという意識があったように思う。

高校時代の優先順位の図が、下記の図2である。

	自己	他者
外見	1	2
内面	3	4

図 2 高校時代

高校時代の私は、異性への関心が高まり、異性のことを強く意識していた。また、他者をよく観察するようになった。そして、自分がかawaiiと思う女の子や、一般的に見てもかawaiiと思われる女の子は、高い確率で人気があったので、外見的魅力というものが、人気を得る際に、強力な力となることを知り、自分が他者から好かれるためには、自分の外見的魅力を向上させることが重要であると考えていた。そのため、高校時代も、自分の外見が、優先順位の1番となった。そして、自分の外見的魅力を向上させるには、外見が魅力的な子と仲良くなり、その子にメイクの仕方や、服装、髪型を教えてもらい、マネをするために、かawaiiと思う子と、進んで仲良くなった。

また、異性にたいしても、小学校、中学校時代と同じように、まず外見から気に入り、その子と仲良くなり、恋愛対象としてみるようになった。

4.4 浪人時代

浪人時代の私は、高校時代と同じように、化粧をして髪をセットし、服を選んで予備校に通っていた。ただ、アルバイトをしていなかったため、自分の自由に使えるお金が減り、あまり新しい服などは買わず、自分が当時持っている服や靴でかawaiiと思うものを選んでいった。

この時、私は初めて異性と付き合うことになった。その男の子は、見た目には一般的には普通の子だった。高校時代までは、まず外見をみて、自分が「かっこいい」と思う男の子と仲良くなり、恋愛対象として好きになっていたが、浪人時代、なぜその男の子を好きになったのかを考えると、その子と一緒にいると、とても楽しいからだった。話をしていると、話題が合い、自分がよく笑っていたように思う。異性と付き合うということは、多くの時間を一緒に過ごすということが分かっていたので、多くの時間を一緒に過ごすのであれば、一緒にいて自分が楽しめる、その子と付き合いたいと思うようになっていた。それから、異性を恋愛対象としてみる時に、性格と言う部分が大きいウェイトを占めるようになった。

高校時代と同じように、このときも、好きな人に、少しでもかawaiiく見ら、自分の外見的魅力によって、その彼氏との関係を維持していきたいという意識が働き、その人に会う

時には、普段より長い時間をかけて丁寧に化粧をし、服や靴を選び、髪型をセットしていた。

4.4 大学時代

大学に入学すると、高校時代と同じく、私服、茶髪、着装に関してはほとんど自由な格好で学校に通った。

私は、高校時代に引き続き、毎日メイクをして、着ていく服装を選び、その服に合わせて、カバンや靴を選んで学校に通った。

大学に入ってから、専攻内で、女の子の仲良しのグループは一応存在はしたが、結束は高校時代などよりも非常にゆるく、仲良しグループ以外の子らとも、よく話したり、一緒にいたり、自由な関係だった。また、多数のアルバイトを掛け持ちし、それぞれに仲のよい友達ができただので、一つの集団にたいする執着心は、ほとんど持っていなかった。

高校時代よりも、アルバイトの自給も上がり、また、サークルやクラブに所属しなかったため、アルバイトをする時間もたくさんあり、自分の自由に使えるお金が増え、よりいっそう毎月の服や靴やカバンや化粧にかかるお金が大きくなった。

大学に入ってから新しく興味をもったのは、ブランドものである。雑誌に載っているということもあったが、それよりも、仲のいい友達が、ブランドもののバッグや財布などを持ち出したからである。ブランドもののバッグなどを持っている女の子や友達を見ると、私にとっては、とても魅力的で、大人っぽく見え憧れた。そこで私は、ほぼ毎日アルバイトをし、毎月の服を買うお金とは別に、お金をため、ブランドもののバッグや財布を買うようになった。高価なブランドものを持つことによって、自分が大人になったような気分で気持ちよかったのを覚えている（写真7）。



大学に入ってから、アルバイトや合コン、紹介などで、異性との出会いがとても増えた。そこで思ったことは、人間関係、特に恋愛において、自分の第一印象がとても大事なものだということだった。話をして性格を知るには時間がかかり、そこに至るまで、そこに至りたいと相手に思わせるためには、外見的魅力が大事だと思った。私から見ても一般的にみてもかわいいと思う女の子は、よく男の子から話しかけられ、電話番号を聞かれ、よくモテた。大学に入った当時は、私の中で恋愛が占めるウェイトが大きく、「彼氏がほしい」と思った時には、入念に化粧や髪型や服装に力を入れた。

そして、化粧や髪型や服装に力を入れ、入念に外見を飾ることによって、外見的魅力が上がったのか、中学や高校時代よりも、ある程度異性にチヤホヤされるようになった。恋愛が絶えることはほとんどなかったし、異性から誘われたり、告白されることも多くなった。その原因として、私は、外見的魅力が上がったためだと思い、やはり、特に異性の人気を得るためには、自分がかわいくなればよいということを確認した。

そして、異性にチヤホヤされたり、「かわいい」と言われることが、自分のなかで、外見を飾る努力にたいするご褒美のように感じていた。

そして、大学2年生の頃、前からやりたかった英会話を習うようになった。2つ年上の姉が、高校生の時にイギリスに留学し、その留学の楽しさをさんざん聞かされていた私は、自分もお金を貯めて、海外留学をしたいという気持ちが以前からあり、その準備として、英会話を習うようになった。自分でローンを組み、自分の収入から支払いをした。この頃から、自分の着装物だけではなく、自分の好きなことや趣味にもお金をかけるようになった。自分の好きなことややりたいことをしていくうちに、大学入学当時みたいに、恋愛が

自分の中で大きなウェイトを占めることがなくなっていき、恋愛の占めるウェイトが小さくなっていった。大学入学当時は、自分に彼氏がない時や、恋愛をしていない時は、毎日がとてもつまらないと感じ、彼氏がいる友達をうらやんだりしていたが、この頃から、そういう感覚がうすくなり、恋愛をしていなくても、自分の好きなことや趣味をしている時は、楽しく感じるようになった。

そして、英会話を習いはじめると同時に、海外留学のことを具体的に決めるようになった。いつ、どこへ、どれくらいの期間、そして、どれくらいの費用がかかるのかを、具体的に知ると、目標とする貯金の金額が明らかになり、アルバイトにやる気が出て、とても楽しくなったのを覚えている。

もちろん、金額は減ったものの、毎月の収入から、服や靴、化粧品は買っていたが、少しずつ貯金が貯まり、大学3回生の夏休みに、1カ月間、オーストラリアのパスで、ホームステイをしながら、語学学校に通えることになった。

そのパスでの1カ月間を振り返ると、人間関係において、第一印象が大事だという意識があった私は、ホームステイ先の家族と初めて会う時や、学校に登校する時は、もちろん、入念にメイクをし、髪型を整え、大学に通うときのようにヒールを履いて学校に行った。その学校は、語学学校だったので、世界のあらゆる国の人たちが、英語を勉強しに集まっていた。その人たちのほとんどが、ジーパンにスニーカーというラフな格好で、学校にきていた。そのなかで、私は、自分が少し浮いているような気がしていた。

1カ月間という短い期間ではあったが、ほとんどの人が、友達をつくらうとしていたし、毎日学校で会うということもあって、日本人を含め、あらゆる国の人たちと、仲良しの友達がすぐにたくさんでき、学校が15時に終わると、毎日、パーティーをしたり、飲みに行ったり、週末には1泊旅行に行ったりと、ほとんどの時間をその子たちと過ごした(写真8)。



その仲良し集団のなかで、1番仲が良かったのは、当時19歳の日本人の男の子だった。その子は、すでに、1年くらいパースにいる子で、毎日、ジーパンにトレーナー、スニーカーという格好で学校に来ていた。

その子にある日、二人だけで話す機会があり、その時に日本語で言われたのが、「なんでいつもそんな格好してるの。ヒールって歩きにくい。しかもスカートとか誰も履いてないし、すごい浮いてるよ。その格好、ここでは似合わないよ」と、自分の外見を否定された。当時の私は、日本にいる時は、ある程度異性からチヤホヤされ、自分の外見を「かわいい」と褒められたことはあったが、異性から自分の外見を否定されたことはなかったので、この時、とても腹が立ち、「女の子がどんな時でもオシャレするには当たり前やん」と言い返した。するとその子は、「馬鹿じゃねーの。ここではオシャレなんて意味ないよ」と、それまで言われたことがないような返事が返ってきて、とても驚いたのをはっきりと覚えている。確かに、その子は、私と友達として仲は良かったものの、チヤホヤするような子ではなかった。

そして、確かに、パースでは、あらゆる国の人たちが集まってきていたので、あらゆる文化によって、かわいい外見の基準が異なるらしく、私から見て、日本では一般的にはかわいいとはいえない子が、男の人に人気があったり、私にたくさんの友達ができたのは、自分の外見的魅力が原因であるとは思えなかった。実際、自分自身が新しく誰かと友達になる時も、外見はあまり関係がなく、話が合う、一緒にいて楽しい、などという人の内面が基準だったように思う。

それから私は、外に飲みに行く時には、たまにヒールを履いたりしたが、学校に行く時には、ジーパンにスニーカーという格好をすることが多くなった。パースでは、自分の周りに人がいる条件として、外見的魅力が高いということは、あまり関係がなく、人の内面が、自分の周りに人がいるかどうかを決定する原因になるということを理解したように思う。

それでも、わたしは、ある程度のメイクだけは、欠かさず毎日して学校に通っていた。それは、日本で友達と遊びに行く時のような入念なメイクではなかったが、パースでも、メイクなしでは学校に行くことができなかった。それは、高校時代にはじめてメイクをしたときの、あの自分の顔の変化の衝撃が、今でも、鮮明に残っているからのように思う。メイクをしている時の自分と、していない時の自分が、あまりにも違うということを自分で思いこんでいるため、メイクをしていない時の自分を男女問わず、他人に見せるのが、

どうしても恥ずかしいという気持ちがあった。

パースから帰国して、自分のなかで変化があった。それは、人間関係をつくることにおいて、外見的魅力による第一印象はもちろん大事なことはあるが、それにくわえて、自分の内面というの、友達になるかならないか、異性に好かれるか好かれないうかという、他者の判断の基準になるのではないかという意識が生まれたことである。

大学入学当時は、異性に少しでもかわいく見られたいために、化粧や髪をセットしていたが、いまの私は違うように思う。もちろん異性に少しでもかわいく見られたいという意識は存在するが、それだけではない。それでも変わらず、化粧もするし、服を買うし、髪もセットしている。今の私は、男女問わず、外出用に外見を飾っているように思う。家の中では、メイクもしないし、楽な服を着るし、髪も巻かない。メイクをしている時の私が、かわいい自分ではなく、外出する時の普通の自分のような感覚である。外出する時、つまり、人と会う時は、メイクをしていない自分では異常であり、人と会う時は、メイクをしている自分で会うのが普通の状態のように思う。もちろん、異性に少しでもかわいく見られ、外見的魅力が、その後のその異性との関係を左右するという意識が存在するから、恋愛感情を持っている異性と会うときは、特別お気に入りの服を着たり、丁寧にメイクをしたり、髪を長い時間をかけて巻き、特別外見に力を入れる。また、人間関係において第一印象が大事だという意識も存在するから、男女問わず、初対面の人と会うときも、特別外見に力を入れる。しかし、同性の仲の良い友達と会うときや、学校に行く時も、ある程度のメイクはするし、流行の服を着たり、髪をセットしたりする。いまの私にとっては、それが普通のことになっている。

浪人時代から大学時代までの優先順位の図が、下記の図3である。

	自己	他者
外見	1	4
内面	3	2

図3 浪人時代～大学時代

浪人時代から大学時代の私は、人間関係において、第一印象がとても重要なものだと思っていた。その第一印象の決定因として最も力を発揮するのが外見的魅力であり、自分と今後人間関係をつくり、自分の内面も知りたいと他者に思わせるには、多少時間がかかり、その間は、外見的魅力によって人間関係が左右されると思っていた。そのため、やはり、

優先順位は、自己の外見が1番になっている。

しかし、浪人時代に初めて付き合った彼氏や、大学2回生の時のオーストラリアでの経験により、自分が新たな人と出会い、その後人間関係をつくるかつくらないかという判断の基準は、他者の性格、内面によることが多くなった。そのため、小学校6年生のころから高校時代まで変わらなかった優先順位に変化が見られ、他者の内面というのが、優先順位2番にくるようになった。

5 これからの自分

今までの私は、化粧や被服、髪型によって、外見を飾り、外に見せる自分を小学校6年生のころからずっと磨いてきた。しかし、浪人時代に、自分が異性を恋愛対象としてみる時に、性格という部分も、その後のその異性との関係を左右する大事な要因となり、さらに、大学時代のオーストラリアでの経験によって、男女問わず、他者と人間関係を形成するかしないかという判断の際、その人の内面、自分の内面も決定因となることを感じた。

これからの自分は、外見だけではなく、内面も磨いていきたいというのが、今の私の正直な気持ちである。

では、内面を磨くというのは、どうしたらよいのであろうか。

Mead (1934 = 1973) は、個人の自己というのは、それ単体では成立せず、自己の形成には他者、社会とのかかわりが必要であり、人は異なった人びととの異なった関係において、あらゆる種類の異なった自己が存在するという。

また、Gergen (1999 = 2004) は、自己を関係性のなかの存在として捉え、人は、常に他者とともにもあり、お互いによって作り上げられているという。

小学校6年生から現在まで、私はあらゆる他者やあらゆる共同体とかかわることによって、そのときそのときの異なる自分が形成された。

小学校6年生のときには、仲良しのオシャレな女の子から影響を受け、外見を気にするようになり、中学時代では、自分が所属する仲よし集団のなかでのかわいい女の子の基準に合致するように、スカートの丈を短くするなど、他者のマネをするようになった。高校時代では、他者を観察することにより、外見的魅力が人間関係、特に恋愛において、自分の人気を得る際に強力な武器となることを意識し、大学時代では、初対面の他者と、この先人間関係を作る上で、自分の第一印象がとても重要であり、そこで力を発揮するのが外

見的魅力だという確信を持った。

私がこのように考えるようになったのは、その時その時の、他者からの影響があったからである。このように考える自分というのは、私の内面、性格である。つまり、私の外見、内面ともに、それぞれの時代における他者からの影響によって作り上げられてきたのである。

したがって、これからの自分が今の自分から変化があるとしたら、私が新たな他者や新たな共同体から影響を受け、新たな自分が形成されていくことによる。

これからの自分は、新たな共同体に所属するときや新たな他者と人間関係を形成するとき、今まで所属してきた共同体や他者とは少し雰囲気異なる共同体に所属したとしたら、そこでまた他者から影響を受け、今までとは異なる自分が形成されるかもしれない。

自分がある他者と新しく親密な人間関係をつくるということは、外見的魅力であれ、内面的魅力であれ、なにかしらその他者にたいして魅力を感じたからであり、また、その他者とこの先も人間関係を継続し続けていきたいと思うのは、一緒にいて楽しい、話が合う、自分にとって勉強になるなど、その他者の内面による魅力が大きなウェイトを占める。

これからの自分が、内面的にも今より良い人間になるためには、これからいろいろな人と出会い、自分が内面的に魅力を感じる他者からの影響を素直に受け入れ、その影響により、これからの自分の内面が磨かれていくのではないだろうか。

では、他者や共同体から影響を受け、どのように自分が形成されていくのであろうか。

Mead (1934 = 1973) は、自己というのは、I と me の 2 つに区別できる局面とともに進行する社会過程であるという。

Mead (1934 = 1973) のいう me とは、対他的な自己であり、I とは、対自的な自己である。

私は、外に見せる自分、すなわち、Mead (1934 = 1973) のいう me を、小学校 6 年生のころからずっと磨いてきた。常に自分を取りまく共同体のなかに所属し、共同体のメンバーたちの態度を持ち、彼らが自分にたいして何を望んでいるのかということ、自ら想定し、その共同体へ適応するために、外に見せる自分を磨いてきた。I とは、この me に反作用する対自的な自分、すなわち、私の内面である。I は、共同体のメンバーが自分にたいして何を望んでいるかを理解した上で反作用する、つまり、他者に適応するのではなく、人が自分を表現する方法、いわゆる、自分らしさである。そして I は、人に重要な感情を与えるという。

たとえば、中学生時代に、自分が所属する仲良し集団のなかで、「制服の膝下の長いスカートはダサく、膝上の短いスカートがかわいい」という暗黙の規範があった時、私も他者のマネをして膝上の短いスカートをはくようになったのは、仲良し集団の他者からそうしろという要求がなされていたからである。その他者からの要求を自分の意識のなかで感じ、他者の態度にたいする組織化された組み合わせとして me が構成され、私も自分のスカートを短くするようになったのである。

Mead (1934 = 1973) は、me とは、本質的にある社会集団の成員であり、その集団の価値、社会に属する価値を重要とする経験であり、自己犠牲をも要求するという。確かに、中学時代、自分が所属する仲良し集団の他の成員全員が膝上の短いスカートをはくなかで、自分らしさ、すなわち I を犠牲にし、自分もスカートを短くするようになった。me であるということは、所属する共同体への適応であり、人に共同体の成員であるという尊厳を与え、これにたいして I は、その共同体の社会状態の墜落を引き起こすかもしれないし、より高度の統合を引き起こすかもしれない、個人の反応である。

私は、共同体の成員でいたいという所属意識のために、me ばかりを受け入れ、I を抑えていたように思う。対自的な自己である、自分の内面も磨いていくためには、他者の態度を自分に取り入れた時に反作用する自分らしさである I を解放しなければならない。

たとえば、制服の短いスカートをはくという他者からの要求にたいして、me が構成され、それに反作用する I が、もし「校則ではスカートの丈は膝下なので、膝下の長いスカートをはくべきだ」と構成されたとしたら、その I を解放しなければならない。それは、その共同体の規範に反し、共同体の結束を低下させることになるかもしれない。それを恐れて、中学時代の私は、自分らしさ、I を抑えてきたのである。

これからの自分は、他者の態度や要求にたいして、その通りに自分を表現するだけでなく、それにたいする自分らしさを大事にしていこうと思う。

たとえば、自分が新たな他者や共同体に属し、その成員からの態度や要求を自分が想定し、「こうした方がいい」という me が構成されるが、それにたいして「自分はどう思うか」、「自分がどうしたいか」という I が反作用して構成される。確かに、共同体からの要求に合う「こうした方がいい」行動をとった方が、その共同体に所属し続けることができるであろう。しかし、そこでは I が抑えられ、自分らしさが犠牲にされる。

これからの自分は、他者や共同体からの要求を自分のなかに取り入れたとき、ただ単に共同体にとって「こうした方がいい」という行動をするのではなく、他者からの要求にた

いして、「自分は思うか」、「自分がどうしたいのか」というIである自分らしさをただ抑えるのではなく、状況によっては解放し、行動していきたい。

このIの解放によって、自分に重要な感情が生まれる。それは、解放された自分の反応が、共同体にとって、より高度の結束を生み出すものであるか、それとも結束を弱めるものであるか、という状況に大きく依存している。

もし、私の自分らしさというものが、共同体にとって、より高度の結束を生み出すものになれば、私の感情というのは、自信にあふれ、その後の私の内面の形成に大きく影響するであろう。

また、一方で、もし、私の自分らしさというものが、共同体にとって、結束を弱めたり、さらには、自分がその共同体の成員ではなくなる状況に達するかもしれない。そのときの私の感情というのは、疎外感や後悔にあふれ、その後の私の内面の形成に大きく影響するであろう。

小学校6年生のころから、自分にとって重要な他者と言うのが、親から友達へと変化し、学校での仲良しグループが、私の日常生活のなかで、重要な役割を果たすことになった。このとき私は、自分が所属していた仲良しグループからはみ出して学校生活を送ることが、どうしても耐えられないことであった。

そのため、私は、共同体の成員たちの態度を自分のなかに取り入れ、他者が自分にたいして何を望んでいるのかということ自分で意識し、その組織化された組み合わせであるmeばかりを受け入れてきたため、自分らしさの解放をせず、Iが自分に与える感情である自信や疎外感、後悔の感情などを持つことがとても少なかったと思われる。

そのような感情の影響を持たずに形成されたのが、今の自分の自己である。

これからの自分は、他者からの要求にたいする反応に反作用する自分らしさを解放することによって、自分の中にさまざまな感情を生じさせ、その感情というのが、これからの自分の内面形成に大きく影響し、今までとは異なる自分が形成されるであろう。

Mead (1934 = 1973) は、I とは、反応によって社会を再構築し、したがってその社会に所属する me を再建するものであるという。このIを、Mead (1934 = 1973) は、芸術家たちの表現にたとえている。

芸術家たちの表現というのは、他から区別できる独創性を導入しており、そのときそのときの共同体の因習を破壊するものであるかもしれないし、それは、meのなかにはないものであるという。

人は、自らを取り巻く環境によって影響されると同時に自らの環境に影響し、人は所属する共同体と受動的ではなく、相互的關係にある。

偉大な指導者や宗教的天才というのは、共同体の成員であることを通じて、共同体それ自体の可能な大きさを無限に増大させたり、自らが反応していた共同体を変革した人々であるという。

芸術家や偉大な指導者、宗教的天才というのは、自分が所属している共同体の態度に反応した me ばかりを受け入れ、自分らしさである I を抑えてきた私とは対照的であるといえる。彼らは、それぞれが所属している共同体の成員たちの態度に反応した me よりも、共同体のより高度の結束、または、共同体の結束の墮落を引き起こすかもしれない自分らしさ、I が、彼らの自己形成に大きく影響してきたのである。

芸術家たちのように、この自分らしさの追及による、私のなかでの me と I のバランスの変化によって、今までとは異なる自分が形成され、自分の内面に変化が現われるのではないだろうか。

おわりに

この卒業論文を作成することを通して、なぜ自分は化粧をするのか、髪をセットするのか、外見を飾るのかということが、1 つずつ明らかになっていき、それぞれの理由に自分自身納得させられるものであった。舞台の上でパフォーマンスを行ってきた私は、いろいろな役を演じてきたが、どれも本当の私であったように思う。

今回、自分自身がどんな人間なのかを明らかにし、自分が今後どのような人間になりたいのかを、時間を取り考えてみたが、これからも、時には、自分を見つめなおしてみようと思う。

参考文献

Barbara.M,Newman and Philip.R,Newman.1975,Development Through Life. (= 1980 , 福富護・伊藤恭子訳 『生涯発達心理学 エリクソンによる人間の一生とその可能性』川島書店)

E.Goffman,1959,The Presentation of Self in Everyday Life,Doubleday&Company. (= 1974 , 石黒毅訳 『行為と演技 日常生活における自己呈示』誠信書房)

G.H.Mead,1934,Mind,Self,and Society, The University of Chicago Press. (= 1973 , 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳 『精神・自我・社会』 青木書店)

K.J,Gergen,1999,An Invitation to Social Construction,Sage Company. (= 2004 , 東村知子訳 『あなたへの社会構成主義』 ナカニシヤ書店)

高木修・大坊郁夫・神山進 , 1996 , 『被服と化粧の社会心理学』 北大路書房

高木修・神山進 , 1994 , 『被服と身体装飾の社会心理学』 北大路書房

40 字 × 30 行 ・ 29 ページ 400 字詰め原稿用紙 ・ 65 枚